

# 三つの“原風景” 槌田満文

—芥川、漱石、荷風のケースをめぐる—

人はだれでも、もっとも古い風景の記憶を持つ。それがその人の一生にどのような影響を与えるかは人によって異なるであろう。しかし、生涯の終りに近づいたとき、ふとその遠い風景が、ある意味をもって蘇ってくるケースは少なくない。

幼年時にもっとも鮮烈な印象を受けた風景は“原風景”と呼ばれる。作家、画家、思想家などの場合“原風景”の持つ意味は、通常の人よりはるかに大きい。かつて赤岩栄牧師は、落日が海に入る愛媛の海岸に生れたことが、毎朝海からの日の出を見て育った人とは決定的に違う自己の思想をばくくんだと述懐していたことがある。あるいは、来迎図のような入り日雲が彼の“原風景”だったのかもしれない。そうした自然による“原風景”はいつまでも変わらない場合もあるが、都会で育った人の持つ“原風景”は、ほとんどがその原型をとどめない。東京のように変貌の激しい都市にあっては、ことにその傾向がいちじるしい。

山の手生れの夏目漱石、下町育ちの芥川龍之介、幼年時代を山の手と下町ですごした永井荷風——この三人の作家について、その“原風景”のありかたを探ってみることにしたい。

翻訳を除くと、芥川龍之介が公表した最初の文章は、雑誌「心の花」大正三年四月号に掲載された小品「大川の水」である。当時東大英文科在学中の芥川は二十三歳だったが、実際にこの小品が執筆されたのは二年前の明治四十五年（大正元年）一月のことであった。

「自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て椎の若葉に掩はれた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、直ぐあの幅の広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中学を卒業するまで、自分は殆ど毎日のやうに、あの川を見た。……」と書き出されたこの小品には、常に「云ひ難い慰安と寂寥」を与えてくれる隅田川の水に対する、熱い思慕の情が吐露されている。

芥川的一家は明治四十三年の秋に、大川端の本所小泉町から山の手の内藤新宿へ転居していた。芥川はそれでも、月に二、三度は大川の水を眺めにゆかないではいられなかったという。

「動くともなく動き、流るともなく流れる大川の水の色は、静寂な書斎の空気が休みなく与へる刺戟と緊張とに、切ない程あわただしく、動いてゐる自分の心をも、丁度、長旅に出た巡礼が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、なつかしさ

に、とかしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再び、純なる本来の感情に生きることが出来るのである。……」という一節をみれば、芥川における「原風景」がここにあることを認めないわけにはいかない。

ところで、文筆生活の出発に当たつてこの小品「大川の水」を書いた芥川が、それから十数年の後、この世を去る直前に同じ大川端の見聞記「本所両国」を執筆している事実は、果して単なる偶然であらうか。当時田端に住んでいた芥川が書いた「本所両国」は、人生という長旅に出でいた巡礼が、もう一度故郷の土を踏んで「原風景」を確かめてみたいと考えたケースのように思えるのである。

「本所両国」は昭和二年五月六日から二十二日まで、十五回にわたつて『東京日日新聞』夕刊に連載された。大正十二年九月一日の関東大震災によつて一変した東京風景を、高浜虚子「丸の内」、徳田秋声「大学界限」、小山内薫「芝、麻布」、泉鏡花「深川浅景」、久保田万太郎「雷門以北」、田山花袋「日本橋付近」など十七人による文章で記録した続きもの「大東京繁昌記」の四番目に当たる。挿画は芥川の親友小穴隆一が担当した。

「本所両国」がまだ連載中だった五月十三日に、芥川は改造社『現代日本文学全集』の宣伝講演旅行に出かけている。原稿は旅行の出発前に書き上げていったものである。『新潮』の同年六月号に発表された「晩春売文日記」によれば、五月二日に第七回、三日に第八回を脱稿している。毎日一回分ずつ書いたとしても完成は出発直前だったはずであり、そのペースで逆算すると、实地踏査と執筆開始は四月下旬と推定される。

なぜこのような日時の詮索をするかといえば、実は芥川が遺書で

菊池寛にあててひそかにしたためたのは四月十六日のことで、小穴隆一に遺書を書き残したのもそのころとされているからである。芥川の自殺は七月二十四日未明のことだから、死を決意したのは約三カ月前であった。その後で「本所両国」の实地踏査が行われたことになる。芥川は死ぬ決心をしてから、ふるさとの「原風景」を確かめに行ったのではなからうか。

震災によつて昔日のおもかげを失つた本所両国に対して、芥川は次のような感慨を抱く。「……『江戸の横網鷲の鳴く』と北原白秋氏の歌つた本所さへ今ではもう歴史的大川端に交つてしまつたと言ふ外はない。如何に方法は流転するとはいへ、かういふ変化の絶え間ない都会は世界中にも珍らしいであらう。」

しかしそうした激しい変化のなかにも、昔と同じものが見つかつたなかつたわけではない。「……僕は震災前といふよりも寧ろ二十年前と少しも変わらないものを発見した。それは両国駅の引込み線を抑へた、三尺に足りない草土手である。僕は實際この草土手に「国亡びて山河在り」といふ詠嘆を感じずにはゐられなかつた。しかしこの小さい草土手にかういふ詠嘆を感じるのにはそれ自身僕には惜しかった。……」と書いた芥川は、東京人の宿命ともいえる故郷喪失の思いを深くし、死への決意を強めたことであらう。無常を感じた芥川は、この見聞記を「方丈記」の一節で結んでいるのである。

死と直面していた芥川は、たまたま「大東京繁昌記」執筆の依頼を受けて、ふるさと本所両国の「原風景」を確かめたいつたと考えられるが、夏目漱石の場合は晩年の住まいを生れ育つた土地に定めるといふ偶然に恵まれて、エッセイ「硝子戸の中」で、幼時の「原

風景”をつづっている。

漱石が本郷区駒込西片町十番地から、牛込区早稲田南町七番地の借家に移ったのは、明治四十年九月二十九日であった。大正五年十二月九日に没するまで住んだこの漱石山房は、慶応三年一月五日に生まれた牛込馬場下横町からわずか三、四百メートルの距離にある。漱石が懐旧の情にかられたのも当然であろう。

「硝子戸の中」は大正四年一月十三日から二月二十三日まで、三十九回にわたって東京と大阪の『朝日新聞』に掲載された。その第十九回は次のように書き出されている。「私の旧宅は今私の住んでゐる処から、四五町奥の馬場下といふ町にあつた。町とは云ひ條、其の狭小な宿場としか思はれない位、子供の時の私には、寂れ切つて且淋しく見えた。もともと馬場下とは高田の馬場の下にあるといふ意味なのだから、江戸絵図で見ても、朱引内か朱引外か分らない辺鄙な隅の方であつたに違ひないのである。……」

漱石が生まれた馬場下横町は、明治二年四月に牛込喜久井町という町名に改められた。名主だった夏目家の家紋が井桁に菊なので、漱石の父夏目小兵衛直克が命名したものである。漱石は「私に縁故の深い此町の名は、あまり聞き慣れて育つた所為か、ちつとも私の過去を誘ひ出す懐かしい響を私に与へて呉れない。然し書齋に独り坐つて、頬杖を突いた儘、流れを下る船のやうに、心を自由に遊ばせて置くと、時々私の連想が、喜久井町の四字にばかり出会つたなり、其処でしばらく徘徊し始める事がある」と第二十三回で書いてゐる。

漱石がふるさとの早稲田へ戻つてきた明治四十年には、喜久井町の漱石の生家は半世紀近い歳月を経てなお残存していた。「私は昔

の早稲田田圃が見たかつた。然し其処はもう町になつてゐた。私は根来の茶畠と竹藪を一目眺めたかつた。然し其痕迹は何処にも発見する事が出来なかつた。多分此辺だらうと推測した私の見当は、當つてゐるのか、外れてゐるのか、それさへ不明であつた。私は茫然として佇立した。何故私の家父が過去の残骸の如くに存在してゐるのだらう。私は心のうちで、早くそれが崩れて仕舞へば好いのにと思つた。……」

この漱石の心理は、かなり複雑である。残つていた生家を見て、懐きさよりも先に異和感をおぼえたのは、そこに漱石が抱いていた「原風景」とは別なものを見たからであらう。早稲田田圃、根来の茶畠、竹藪などの背景を失つた生家のたたずまいは、漱石の目にむしる厭うべきイメージとして映つた。「硝子戸の中」執筆の前年に、その生家がきれいに取り壊されたのを知つて、漱石がホツとしたとらしているのもうなずけるように思われる。

人間心理の深いひだを探つていた晩年の漱石にとつて「原風景」とは、たとえば次のような内面世界だったのであらう。「……此豆腐屋の隣に寄席が一軒あつたのを、私は夢幻のやうにまだ覚えてゐる。こんな場末に人寄場のあらう筈がないといふのが、私の記憶に覆を掛ける所為だらう、私はそれを思ひ出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議さうな眼を見張つて、遠い私の過去を振り返るのが常である。……」

ふるさと本所両国に「原風景」をもとめて、わずかにおもかげをとどめる「小さい草土手」に無常を感じた芥川、晩年になつて生れ育つた早稲田に住み、残存する生家を崩れてほしい「過去の残骸」

とみた漱石——その両者どちがって、永井荷風の場合は、東京とはまったく違った土地に、その「原風景」を発見している。

荷風が市川市菅野の杵屋五隻方に寄寓したのは昭和二十一年一月からであった。同じく菅野の小西茂也方に移った昭和二十二年には、エッセイ「葛飾土産」を書いてゐる。

「市川の町を歩いてゐる時、わたくしは折々四五十年前、電車も自動車も走つてゐなかつたころの東京の町を思出すことがある。……」と書き出された一章で、荷風は生れ育つた東京の「原風景」が、思いもかけず市川という近隣の町に生き続けていることを記した。一つは山の手の風景であり、一つは下町の風景である。

「杉、榎木、榎などを植ゑつらねた生垣つづきの小道を、夏の朝早く鯛を売りあるく男の頓狂な声。さてはまた長雨の晴れた昼すぎにきく竿竹売や、蝙蝠傘つくるひ直しの声。それ等はいづれもわたくしが学生のころ東京の山の手の町で聞き馴れ、そしていつか年と共に忘れ果てた懐かしい巷の声である。」——これは明治十二年十二月三日、小石川区金富町四十五番地に生まれた荷風における山の手の「原風景」の一つに他ならない。

「夏から秋へかけての日盛に、千葉県道に面した商ひ舗では砂ほこりを防ぐために、長い柄杓で溝の水を汲んで撒いてゐることがあるが、これも亦わたくしには、溝の多かつた下谷浅草の町や横町を、風の吹く日、人力車に乗つて通り過ぎたころのむかしを思ひ出させずには置かない。」——これは六歳から八歳まで、下谷区竹町四番地にあった母の実家鷲津家に預けられていた荷風の臉に残る下町の「原風景」であろう。

この場合、市川という町に東京の山の手と下町の「原風景」を、

荷風が同時に発見した点に注目したい。芥川や漱石どちがって「原風景」が一つでないことに、荷風文学の特質を見るからである。

荷風の父久一郎はアメリカに留学したことのある高級官吏で、禾原と号する漢詩人でもあった。荷風の母恒は、久一郎が師事した尾張藩の藩儒鷲津毅堂の娘である。長唄の上手な芝居好きだったばかりでなく、キリスト教の信徒でもあった。荷風の東洋的好尚と西歐的教養の素地は、この両親から複雑ななたちで享けているとみるべきであろう。

しかし、幼い荷風は官吏の父に反抗し、芸事好きの母になつた。荷風の追憶のなかで、たとえば明治四十二年作の短編「狐」に描かれた小石川の永井邸が、嫌悪する父の風貌と結びついているとすれば、思慕する母のおもかげは、明治四十四年作の小品「下谷の家」に描かれた床の間に甲冑のある鷲津家と結びついている。

下谷の祖母の死に際して、荷風の童眼に映つたものは「鎧と十字架」という二つの世界であつた。古い東洋と新しい西洋が、山の手と下町という二つの「原風景」と重なる、荷風の脳裡に刻みこまれたとみられるのである。

地方出身の作家は、たいてい精神形成期をすごした郷土の影響を色濃く身につけている。たとえば九州柳河生れの北原白秋と、東北津軽育ちの太宰治の文学をくらべるとき、その違いが風土の差に負うところ大きいことは否定できない。

東京の作家たちの場合、地方作家のような郷土は存在しなくても、それぞれの「原風景」を持つてゐる。芥川、漱石、荷風のケースのように、作品のなかにそうした「原風景」はさまざまありかたで生きているといえるのである。